

タクシートの乗車拒否と

オリパラのレガシー

共生社会の実現に寄与

東京オリンピック・パラリンピックが残したレガシーの一つに、ジャパンタクシーがある。街で良く見かけるようになった、背高のっぼのタクシーのことだ。この車種は「環境性能の良いハイブリッド車」という利点と「車椅子のまま乗れるユニバーサルデザイン車」という利点の二つを兼ね備えている。

しかし価格は、それまでのタクシー専用車両（クラウンコンフォート）より100万円高い。そこで2016年からオリパラに向けて国が60万円、東京都が40万円、計100万円を助成して普及に努めてきた。その結果、オリパラが終了した今年9月現在、都内の法人タクシー3万台のうち半数がこれに切り替わった。

ジャパンタクシーは、オリパラの掲げる理念である共生社会の実現に大きく寄与したヒット作である。

ところが、いざ車椅子の方が、このジャパンタクシーに乗ろうと手を上げると、空車だったのが突然回送に切り替わる残念なケースが頻繁に起きている。車椅子用スロープを出すのに不慣れだと10分くらいかかることに、ドライバーさんがちゅうちよするからだと思う。ちなみに

東京都議会議員

早坂 義弘



環境とUDを兼ね備えたジャパンタクシー

その10分間は料金は請求できない。

障害者割引の負担は

ところで、タクシーには障害者割引という制度がある。どのタクシーに乗っても、障害者手帳を見せると10%が割り引かれる。タクシーの料金は国の認可のもとに決められる仕組みだが、1990年の料金改定(値上げ)に合わせて、この障害者割引という制度が導入された。では、その割引額を誰が負担しているかという点、実は各タクシー会社(個人タクシーならドライバー本人)なのである。コロナ前の18年の統計によると、都内の法人タクシーの障害者割引総額は10億円に達した。

しかしコロナ禍の現在、人流は著しく制限され、都内法人タクシードライバーの平均年収は330万円まで下落した。タクシーの乗車拒否は道路運送法で禁じられている。だが、こうした環境下で車椅子のお客さんを見つけた際、出来ればお乗せしたくないという感情がドライバーに湧いてしまうのは、人情と

移動の自由は、基本的な人権の一つに数えられる重要なものだ。その大切な移動の自由を保障することに、タクシーの障害者割引は大きく寄与してきたといえる。しかし、制度発足当初の美しい気持ちでスタートしたタクシー会社の自己負担は、コロナ禍で売り上げが半減した今日、極めて大きな負担になっている。

しては理解できる。

移動の自由は、基本的な人権の一つに数えられる重要なものだ。その大切な移動の自由を保障することに、タクシーの障害者割引は大きく寄与してきたといえる。しかし、制度発足当初の美しい気持ちでスタートしたタクシー会社の自己負担は、コロナ禍で売り上げが半減した今日、極めて大きな負担になっている。

割引制度の持続に向けて

ところでタクシーの障害者割引という制度の持続可能性を考えた際、その一部分(あるいは全て)を国や自治体が負担することや、あるいはあらゆるタクシー利用者に例えば1回数円のユニバーサル料金を課し、社会全体で支える仕組みが求められると思う。そうしたお金がわずかでもドライバーの取り分になり、かつ車椅子用スロープの更なる改良が進めば、乗車拒否などなくなるだろう。

なお鉄道や航空機に関しても障害者割引制度があり、いずれも事業者負担だ。こちらとの整合性を考えるべきだという意見もある。しかし鉄道も航空機も、客が乗っていないと定額運行するものなので、ドライバーがお客さんを選ぶという仕組みにはなっていない。加えてタクシーのドライバーは、鉄道や航空機の運転手・パイロット

と異なり、その収入の6割ほどが歩合制であるということも忘れてはならない。

冒頭に述べた国と都の100万円の助成はオリパラまでとされ、22年度予算に引き続き組み込まれるか、現時点では未定だ。しかしオリパラは、開催すること自体がゴールではなく、開催をきっかけに社会を更に良くしようという跳躍台であったはずだ。だからこそ他のスポーツ大会とは異なり、多額の税を投入してきたのである。であるなら

オリパラの残したレガシーであるジャパンタクシーが、せっかく車椅子のまま乗れるユニバーサルデザインで作られたにもかかわらず、乗車拒否が起きるようでは余りにも切ない。ドライバーが車椅子のお客さんを進んでお乗せするような気持ちになるような制度設計が必要だ。美しい気持ちに頼るだけでは、世

は、環境ユニバーサルデザインという二つの利点を兼ね備え、オリパラで終わりとしてしまっただけではない。ここに述べたタクシーの事例は一例に過ぎない。オリパラの残したレガシーをいかに維持・発展させていくか、大会終了直後の今こそ勝負だ。今その気持ちを忘れてしまっただけで、二度とレガシーの議論など起きないだろう。